

リョーサン菱洋ホールディングス株式会社

リョーサン菱洋株式会社

リョーサン菱洋、フィジカル AI に関するプライベートカンファレンスを開催

早稲田大学 速水悟氏らのセッションに加え、同様の課題に取り組む参加企業の意見交換を実施

リョーサン菱洋株式会社は 2026 年 7 月 30 日(木)に、東京都内で招待制のプライベートカンファレンス（以下「本イベント」）を開催しました。テーマは、「世界市場で勝ち抜くための、日本製造業の AI 活用とは」で、日本ヒューレット・パカード合同会社との共催（エスビディア合同会社協賛）のもと実施しました。リョーサン菱洋のお客様である半導体製造装置メーカーや自動車部品メーカーをはじめとする製造業各社の管理職層約 20 名が参加しました。

■ 本件の注目ポイント 3 選

- 参加者は、AI 活用に関する事業戦略を担う管理職層で、「自社製品への AI 実装」や「生産現場における AI 活用」の実現に向けた情報収集や、課題解決を目的に参加。
- セッションでは、早稲田大学の速水悟氏らを迎え、最新事例の紹介や、AI 活用を自社単独で推進するのではなく、パートナー企業との連携を通じて **スピード感を持って取り組むことの重要性**が示された。
- 参加者からは、情報収集の場として継続開催を望む声上がるほか、**同様の課題を抱える企業との意見交換ができた点についても高い評価**を得た。



どのように取り組めばいいのか？

- ユーザ企業に求められるもの
 - 対象とする製品や技術領域の多様性が極めて高い
 - 新技術への対応が求められる一方で、開発を加速したい
- スピード重視
 - 使えるAIツールは、割り切って使う（時間をお金で買う）
 - 現場に効果を実感してもらって、社内で活用の経験を広げる
- 外部との連携が必要
 - 技術の進歩があまりに速いので、自社だけでは追いつけない
 - 外部との連携が必要

2026/07/30 S. Hayamizu

8

早稲田大学速水悟氏プレゼン資料より抜粋

■ 開催の背景と目的

当社が事前に実施したアンケートでは、

多品種少量生産に適した自動化や、フィジカル AI の活用方法を見いだせていない

生成 AI はオフィス業務で試しているものの、製品開発や生産現場への展開には至っていない

といった課題がよせられました。これらを背景に、AI 活用に関する事業戦略の立案や投資判断を担う管理職層を対象に、製造業における最新の AI 活用事例や、導入の考え方を共有する本イベントを開催しました。

本イベントでは、**参加者の AI 活用イメージの具体化を支援**するため、用語や技術の定義が複雑で、進化のスピードの速い AI 分野の最新情報を“**製造業に特化して提供**”しました。あわせて、通常は社外共有されにくい課題や取り組みについて、**参加者同士で意見交換**を実施することで、新たな気づきや実践のヒントを創出し、業界全体の AI 活用の促進を目指しました。

■ 参加者の声

- **自社製品への AI 実装を進める必要性**を感じる一方、競合より取り組みが遅れている**危機感**を持っていた。今回のテーマは、**従前より感じていた課題に即しているテーマ**だったので参考になった。継続的な情報収集やネットワーク形成の場として、今後も定期開催を希望する。（半導体製造関連企業 R&D 部門）

【本件に関するお問い合わせ】 リョーサン菱洋ホールディングス 広報部 担当者：佐伯

pr@rers-grp.com TEL : 03-3546-6331

- **AI 人材の育成**など、自社と同様の課題感を持った企業と意見交換を行い、具体的な議論ができた点が良かった。
(半導体製造装置企業 開発部門)



セッション後の参加企業同士の意見交換の様子

リョーサン菱洋の AI ビジネス担当者がファシリテーターを務め
AI 活用推進における課題や、フィジカル AI への期待について
参加企業同士で意見交換を行いました

■ セッションの内容

セッション 1 : 「日本製造業における AI 活用の現在地 — 次世代現場力へのパラダイムシフト」

早稲田大学 知覚情報システム研究所 招請研究員 速水悟氏

速水氏は、アメリカやドイツの事例を踏まえ、日本と海外では AI 導入の進展に大きな差があると指摘しました。その上で、急速に進化する AI 技術を競争力につなげるためには、**自社だけで取り組むのではなく、パートナーとの連携を通じてスピード感を持って推進することが重要**だと語りました。



セッション 2 : 「Physical AI がつくる製造現場の新しいインパクト」

[MakinaRocks 株式会社](#) 日本事業責任者 永井宏志郎氏

永井氏は、焼却炉制御や溶接自動化などの AI 導入事例を紹介。**日本製造業における AI 導入は一律ではなく、現場ごとの課題や環境に応じた最適化が不可欠であると説明**しました。AI 導入実績を積み重ねることで、生産性向上の実現を後押ししていく考えを示しました。



セッション 3 : 「暗黙知をデジタルへ。現場情報を AI が活用できる資産へ変える」

[インダストリエイト株式会社](#) 代表 板野光司氏

板野氏は AI 活用の一歩目を左右するのは、AI モデルの構築ではなく、「**現場に蓄積された暗黙知をいかにデータ化し、AI が活用できる資産へ変換できるか**」にあると強調しました。まずは、長年にわたり現場で培われてきた判断基準やノウハウを整理し、組織の知識として継承できる形で蓄積することが重要であると話しました。

